



Title	ソヴェエトの破片と生きる：「集団行為」の半世紀 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	生熊, 源一
Citation	北海道大学. 博士(学術) 甲第14564号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/81487
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Genichi_Ikuma_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名： 生 熊 源 一

学位論文題名

ソヴィエトの破片と生きる：「集団行為」の半世紀

・本論文の観点と方法

後期ソ連では、公的に制作される芸術とは別に、アパートや野外において私的に展開される非公式芸術が存在していた。本論文ではその中でも、とりわけモスクワ・コンセプチュアリズム（以下「コンセプチュアリズム」と呼ばれるコミュニティの動向を扱った。分析の中心となる対象は、1976年に成立し、90年代前半の中断を挟みつつも現在まで活動を続けるグループ「集団行為」である。本論文では彼らの活動を、ソ連という条件に対する持続的応答という観点から捉え直した。彼らの芸術が後期ソ連文化としての性格を半ば残したまま、ポストソ連期にも展開されていたのではないかと問いかけ、半世紀にわたる集団行為の来歴を新たな見方で提示した。

検討の素材としては、集団行為の記録集である『郊外への旅』を主として用いた。これは集団行為が行ってきたアクションの概要を示す記録文を中心として、リーダー格であるモナストウイルスキーによる序文や参加者の参加記、そして対話の記録が束ねられたものである。加えて、モナストウイルスキーの日記群も資料として使用した。

後期ソ連文化に関する特筆すべき先行研究として、本論文では二つの著作を想定した。そのうち一つは、アレクセイ・ユルチャクの『最後のソ連世代：ブレジネフからペレストロイカまで』である。ユルチャクは後期ソ連文化において、ヴニェと呼ばれる原理が見出していることを論じた。ロシア語で「外」を意味するヴニェは、ソ連のシステムの再生産が内部に外部を生んでしまう原理であり、ユルチャクによれば後期ソ連文化の担い手たちは、このヴニェの原理によってソヴィエトの規範を内部から掘り崩してきた。集団行為の営みは、このヴニェという外部の問題系と関係するものであると考えられるが、ソ連崩壊を終着点として考えるユルチャクの議論の枠から外れ、ソ連崩壊後も脈々と展開されてきた。本論文ではこの点を重視し、ユルチャク的なヴニェの原理のその後の展開を辿った。

このヴニェのオルタナティブな在り方として導き出されるのが、喪という形態である。この点に関して参照したのが、ソ連にまつわる記憶を喪の観点から論じたアレクサンドル・エトキントの『歪んだ喪』である。ポストソ連期の集団行為の活動の大きな特色は、ソ連時代に対する追憶の身振りが度々観察されることである。初期から継続して用いられてきた手法がこのような回顧の性格を帯びるとき、過去はいかなる喪の作用を受けるのか。本論文では、ポストソ連期まで残存したヴニェの原理が、喪の働きを果たすようになるプロセスを明らかにした。

・本論文の内容

本論文は全3部、8章から構成される。第1部では、彼らの芸術の素材となるモノとの関係について、ソ連期に焦点を当てて論じた。第2部では、80年代とソ連崩壊後の連続性を念頭に置き、彼らが自らを取り巻く周辺環境をいかに制作に取り込んできたかを検討した。第3部では、彼らの自己表象に目を向け、ソ連崩壊後の回顧的な視線を浮かび上がらせた。

第1部第1章では、集団行為以前のコンセプチュアリズムの胎動を扱った。集団行為に影響を与えたカバコフらの念頭にあったのは、素材と言語の関係に対する問いであった。彼らの非公式の師であったファヴォルスキーは素材と言語を使いこなしたが、コンセプチュアリズムの祖たちは、その素材と言語の蜜月を十全な形で受け継ぐことはなかった。それゆえコンセプチュアリズムの言説とはある種の屈折を当初から抱えたものであり、事物との距離及び語ることの不可能性ゆえに絶えず語ることを試みるような性質を持って生まれてきたのである。第2章ではコンセプチュアリズム

にとって重要な事物の代表例として紙を想定し、この紙面から平面についての思考が生み出されたのではないかと問いかけた。ピヴォヴァロフ、ルビンシテイン、プリゴフといったコンセプチュアリズムの担い手たちが探求してきた紙面の断片化と再構築の試みは、集団行為の制作の先駆けとなっていた。モナストウイルスキーはこうした紙面のイメージを基に、自分たちの営みを、外界を下地として構築された平面とみなす言説を展開した。重層的な紙面の構築という作業が、理論的なレベルにおいても自分たちの身振りを位置付けるためのフレームワークを準備したのである。第3章では事物に吹きかけられる吐息に注目し、モナストウイルスキー及び集団行為におけるモノと呼吸の連関が、ソ連的な対物関係への応答として理解可能であることを示した。彼らが行ってきたのは、息を吹き込むことによってモノを活性化させようとするソ連的な欲望を転倒させ、モノが発する呼吸の観察を行い、人間による吹き込みという行為自体を凍結させる試みであった。以上のような第1部の事例から、ソ連期の集団行為の対物関係が、ソ連世界を下敷きにしつつ、そこに生じた亀裂を追求する姿勢を背景として構築されてきたことがわかる。このようなソ連的な環境との対峙という契機は、先行研究では、ソ連崩壊期にその役目を終えたと想定されてきた。

第2部では、こうした先行研究の批判的検討にもとづき、集団行為の最盛期にあたる1980年代とソ連崩壊後における活動の連続性を提示した。第4章では、第1部で検討した事物の問題を念頭に置きつつ、コンセプチュアリズムにおける言葉とモノの探求が周辺環境の分析と地続きであることを示した。集団行為は、外部と内部の接触という構図を用いて、自分たちを取り囲むコンテクストを可視化し、事物の意味づけの再構築の場として巧みに表現してきたと言える。第5章と第6章では、彼らの外部に対するアプローチの事例として、風景と宇宙というテーマを取り上げた。双方の章に共通するのは、ソ連世界における風景ならびに宇宙の意義付けに対する彼らの批評的な意識である。ソ連崩壊後にもこの批評的アプローチは継続されてきたのであって、この事実は見逃してはならない。ただし、すでに解体すべきソ連という条件が失われたからには、彼らの活動も一定の変容を被らざるをえなかった。この変容の例として顕著なのが、時間の問題に対する意識の強化である。風景と宇宙に対するアプローチの中で、自らの活動が時間の流れとともにあることが強く意識されていった。

第3部では、コンセプチュアリズム及び集団行為における主体性の問題と埋葬行為に焦点を当てた。第7章で扱ったのは、キャラクターの美学である。コンセプチュアリズムの作品に登場する種々のキャラクターは、自分たちを分身として設定し、外側から観察する上で重要な役割を果たしていた。集団行為のパフォーマンスにおいて重要視される人影も、一種のキャラクターであったとみなしうる。この人影は、ソ連崩壊後になると亡霊のような性格を獲得し、過去との対峙という契機を際立たせるようになる。第8章では、モナストウイルスキーの日記群を対象として議論を進めた。彼の日記から見えてくるのは、1980年代には無時間的な観念に耽りながら別世界へと没頭したのに対し、ソ連崩壊後には不可避的な時間の流れに捉えられ、ポストソ連期におけるソ連世界の残存に関心を寄せるようになった姿である。分析的な態度を見失い、ソ連世界との連続性によって心を蝕まれていく時期もあったが、彼のこのような葛藤を経て、集団行為における喪は形作られていったと考えられる。